

第 39 回土木計画学研究発表会（春大会）：2009. 6. 13～14（徳島大学）

スペシャルセッション（SS）討議内容の記録

セッション名：「地域活力」に関わる学と行政～実践的民俗学の見地から土木を考える～	
日付： 6月 13 日（土）曜日，セッション時間： 8:30 ～ 10:00	
オーガナイザー・司会者名（所属）： 藤井 聡	
討 議 内 容	<p>セッション全体：山下・藤井からの以下の報告に引き続き、川崎からの指定討論がなされた。</p>
	<p>山下裕作（独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 農村工学研究所）</p>
	<p>データの見方を変えれば、「限界集落」というのはほとんど実在しないことになる。限界集落は単なる「数学的社会科学」による一面的な論理に基づく仮定の存在ともいえる。「体験的人文科学」の見地から言うなら、実際の集落は完全に死滅しておらず、幾ばくかの生命力を必ずみながらせているものである。そしてその生命力は、例えば民俗学的調査をすることによる僅かなコミュニケーションを実施したり、それを羅列的にまとめるだけで、大いに活性化したり、他者にその生命が伝染していく可能性すらあり得る。そうしたコミュニケーションを大切にするなら、まだまだ活力を再生するような集落は日本には多数存在するのであり、羅列的認識によって、様々な思いや生命力が広く伝播し、未来へ伝承されていくことは十二分にあり得るのである。</p>
	<p>藤井 聡（京都大学 都市社会工学専攻）</p>
	<p>我々「土木計画学」は、これまで山下氏が指摘する「数学的社会科学」の枠組みに準拠しすぎてきていること、そして、「体験的人文科学」の方法論を残念ながら全く導入してこなかったことを、は否定できない。これからの土木計画を考える上で、この問題は、最も本質的で、重大な問題である。我々はそれに気づかなければならない。いかに効率的に交通や物流をさばけたからといって、その土地や国に守るべきものの一切が消滅してしまっているとしたのなら、そんな交通計画に一体何の意味があるというのだろうか。我々は“便利”になるために生きているのではない。「生きる」という体験的人文科学的なものでしか表現しえぬ営為を行う上での、単なる可能な一つの方便として“便利”というものにあるに過ぎない。それにも関わらず、数学的社会科学に汚染され尽くした現代の土木計画論は、完全なる倒錯に陥っている。便利になることのみを追い求めて何になるというのか。この点について我々は猛省せねばならない。</p> <p>こうした深刻なる問題を打開する重要な糸口は、山下氏が言うところの「体験的人文科学的」を、それぞれの立場から咀嚼するところにあるに違いない。我々はその作業を、これからはじめなければならない。</p>
<p>川崎 雅史（京都大学 都市環境工学専攻）</p>	
<p>我々は「活力」という、最も計画論において重要なものを取り扱ってくる傾向が弱すぎたことは間違いない。そして、我が国の精神的風土である羅列的な思考を、忌避してきた過去を改め、羅列的思考とその表現にこそ、本質が宿りうることを理解しなければならない。</p>	